

---

# 導くもの+

アカリ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

導ぐもの +

### 【著者名】

アカリ

N4556N

### 【あらすじ】

主人公、ティーナが魔導師として活躍する話、「導ぐもの」の世界や人物紹介です。本編の時間には全く関係のない番外編もこちらに載せてあります。

## アルベルティーナ・ギラルティーニ（ティーナ）

主人公。14歳。

黒い髪、天鵝絨色の目。

現在、マーゴ・デ・ブリメーラ一級魔術師、マイブル魔導師候補。

光・火・土・水・風・闇の全属性を使うことができる全属性使い。  
その中でも目の色に入っている風と闇の魔法が得意。  
ディアブロ・アイ魔眼を使って精霊を見ることができたり、ディアブロ・コーチー魔装具を作ることができたりする万能人。

転生して話の舞台である魔法がある世界に来た。

基本的には面倒くさいことが嫌いで人生適度に適当にがモットー。  
しかし、祖母により魔導師マイブルになることが適任となっていることから、目立たないというところがなくなってしまって悲しがっている。  
元から髪や目の色で目立つていたことは気づいているのか、いないのか……。

厳しかった祖母によって鍛え上げられたことによって防御が最強となっている。

武器全般を使いこなし、魔法で似たようなものを作つて攻撃をする。

現在は第3皇子であるバルタザール直属の部下として日々書類と殿<sup>ト</sup>下と戦っている。

ティーナが契約している精霊。

>エーヴく風の鳥。

>ノーテく闇の精靈。 ブラッキー。

マクシミリアン・インフォンティーノ（リアン）

16歳。俺。

利休茶色の髪に深緋の目。  
じきひ

マー・ゴ・デ・シグナディオ

二級魔術師。初回登場時は三級魔術師。  
テグナキヤ・マー・ゴ  
ダブル

火と風の魔法を使う二属性使い。

火の一族であるインフォンティーノの現当主であるバルドメロの息子。

3人兄弟の次男であり、兄と姉がいる。

ティーナとの相性がよく、そのせいでバルタザールの部下になつたといつても過言ではない。

バルタザールのもとでは眞面目に働きつつ、ザールとティーナの2人の会話に参加せずにぼけーと聞いていることが多い。  
ティーナの精霊であるエーヴを見たときから自分も精霊と契約したいと思って精霊について勉強中。

初回登場：5話

クルス・ベナーリオ

50～60歳くらい?  
白+銀髪、天色の目。  
あまいいろ  
わし

マーゴ・デ・ブリメーラ  
一級魔術師。

水と光の魔法を使う一一属性使い。帝国一の水使い。

ティーナの祖母とは同期で魔術師となつた。  
ザールには時々「じいさん」と呼ばれている。

初回登場：2話

バルドメロ・インフォンティーノ

キャラメル色の髪に深緋色の目。

マーゴ・デ・ブリメーラ  
一級魔術師。

帝国一の火使い。一属性使い。

ダンディーなおじ様。

マイブル・ブルーバ  
魔導師の試しの後にティーナを研究室に連れて行って術の改良を  
やつてから、時々ティーナを呼んで術の実験を手伝わせている。そ  
れが結構ハードなのが、バルドメロ本人は気づいていない。  
ティーナにはバルドさんと呼ばれている。

初回登場：4話

マーゴ・デ・ブリメーラ  
セリノ・シルヴエストリ  
一級魔術師。僕。25歳より若そう。  
鶯茶色の髪にリーフグリーン色の目。天然パーマ。

風の名家であるシルヴェストリ家の当主。  
リアンの姉であるジスレーヌとは知り合い?

初回登場: 16話

ドロテア・インフォンティーノ

テグナキヤ・マーゴ  
三級魔術師。

リアンと同期の火使いでリアンの従姉妹。

初回登場: 15話

フレドリカ・ファルコーネ

ベージュグレイの髪にインディゴ色の目。

ティーナの祖母。  
マゴ・デ・ブリスイラ

元一級魔術師。

水と闇の魔法を使う<sup>ダブル</sup>属性使い。治癒術にも長けていた。  
通称、魔女。  
ストレガ

初回登場: 1話

マルシアル・ロジオン

外見年齢20代。俺。

藤鼠色の髪、紫黒色の目。

黒騎士団長。帝国一の閻使いでもある。

ティーナのことが気に入っている。ティーナには警戒されている。今の皇帝とは親戚関係である。

第2皇子であるブノアとは仲がいい。

初回登場：3話

ヴァランタン・モニチヒリ（ヴァラン）

20歳前半。バルドメロの子。も。長男。利休茶色の髪にココア色の目。俺。

白騎士、壮騎士。槍を使う。

性格はバルドメロに似ている。

初回登場：15話

バルタザール・デオ・ロジオン（ザール）

17歳。俺。

金糸雀色の髪に瑠璃色の目。やや長い髪の毛。

ホワイト・ナイト 一二バル・ナイト

白騎士かつ壮騎士

帝国の第3皇子。

魔導師の試しが終わつた後、ティーナを部下とする。ティーナが常識がないため、結構説明係になつてゐる。

初回登場：6話

レオーヌ・ディ・ロジオン

第1皇女。20歳。わたくし。陛下に似てる。髪も田も。

留学中。学院では魔眼とか、魔装具とかを学んでゐる。マシンガントークと一睨みでザールを黙らせることが出来る。

初回登場：11話。

ブノア・レク・ロジオン

陛下の次男。24歳。

魔力が一番あり、魔法可能。  
腹黒。マルシャルと仲いい。オビディオと仲悪い。  
僕。杏色の髪に、ウルトラマリン色の目。

初回登場：12話

オビディオ・ルツ・ロジオン

陛下の長男。25歳。  
体が弱い。政治得意。

パメレシア・オザ・ロジオン（パメラ）

陛下の次女。13歳。  
玉蜀黍色の髪に瑠璃色の眼。  
髪を後ろで縛つていてどことなく凜として中性的なかんじ。

通称、姫騎士。まだ騎士ではないが、次の試験で騎士にならうとしている。

初回登場：19話

オスワルド・ジル・ロジオン

帝国14代皇帝。私

とうせあじじいろ  
玉蜀黍色の髪の毛に群青色の目で、短髪。

初回登場：6話

皇后様

長い杏色の髪の毛に新橋色の目

初回登場：6話

## # その他

ジスレーヌ・モニチエリ

20歳。リアンの姉、バルドメロの娘。  
キャラメル色の髪に葡萄色の目。

王国の学院で理論魔術について学んでいる。

シルヴェストリの当主、セリノから「氷の姫君」と言われる。

初回登場：15話

エルモ・インフォンティーノ

インフォンティーノの前当主。バルドメロの伯父。

初回登場：16話。

ヘリナ・クレメンティ

焦茶色の髪、葡萄色の目。

ティーナが住んでいた村の隣村の子。ティーナを「姉さま」と呼

ぶ。

一応魔装具屋。

あたし 12歳。

初回登場：13話

エメ

任務の子供さらいの犯人?  
ネービーブルーの髪に黒い目。  
精靈見える。

♪モデロく黒いウサギ。

初回登場：10話。

## # 騎士について

現在、帝国が抱えている軍隊は騎士団のみ。（有事の際には魔術師も軍の一部。）  
騎士団には白騎士ホワイト・ナイトと黒騎士ブラック・ナイトの二つの部隊があり、基本の隊の構成は同じ。

一般騎士。一般的な騎士ナイトはこれのこと。

地方に派遣され、2年交代で派遣場所を白と黒を入れかえる。  
(今北・南が白騎士ホワイト・ナイトだったなら2年後は黒騎士ブラック・ナイトというように)

壮騎士（一一バル・ナイト）。地方や大会での活躍によって一般騎士から昇進する。

壮騎士（一一バル・ナイト）の半分は地方、半分は帝都。

騎士隊長 白・黒に7人

白騎士団長 黒騎士団長

騎士団長 騎士団全体を統べる。

## # 魔術師について

### 一級魔術師

マーラ  
マーラ・デ・ブリス

魔術師の中で一番えらい。現在、12人。  
2年に一度の二級魔術師からの昇進試験、または大会での成績によつて決まる。

服装としては、黒いマントをつけることが義務付けられており、黒いマントに魔力をこめた糸で一本の線が縫つてあり（それぞれ目と同じ色になるらしい）、首もとに帝国の鈎がついている。首もとの鈎は魔術師全体でマントの同じところにある。

### 二級魔術師

マーラ  
マーラ・デ・シグナディオ

1年半に一度の二級魔術師からの昇進試験、2属性使い（ダブル）  
以上は魔術師の試験に受かればはじめから二級魔術師になれる。

服装は白いマントで魔力をこめた糸で3本線が引かれている。

### 三級魔術師

マーラ  
マーラ・デ・シグナディオ

1年に1回の試験による。

服装は白いマントで1本線のものである。

## # 魔導師について

### 魔導師<sup>マイフル</sup>とは

- ・全属性<sup>オール属性</sup>使いであること。
- ・一級魔術師<sup>マイゴ・デ・ブリメラ</sup>の各属性でもっとも優れている人に勝つたものであること。

・帝国の王の認証により、魔導師<sup>マイフル</sup>と名乗ることが可能であること。

の3つの条件を満たしたもののが就くことのできる職業である。

帝国では「<sup>マイフル</sup>」に定義はされていても、過去に1人も魔導師<sup>マイフル</sup>となる全属性<sup>オール属性</sup>使いはいなかった。

魔導師<sup>マイフル</sup>になる=帝国の魔術師<sup>マイゴ</sup>のトップになると考えられている。

過去に条件を満たすものがいないため、ティーナがなるまでもまだ未定なことが多い未知の職である。

## 勇者召喚！（上）

あー、今日は何があつたつけ？

数学と、英語と、おお、体育がある！ よし！ ……げ、古文もあんのかよ。予習してね。

俺は今日の授業を確認しながら高校までの道のりを歩いていた。俺が通う高校は自宅から徒歩15分。

いつもは自転車で通つてゐるんだけど、昨日の夜から今日の朝にかけて降つた雪で道路が凍つていて転んだら大変だから今日は徒歩で登校。

体育はバスケだよな！ 俺の見せ場！

久しぶりだよな、最近は体育なかつたから体がなまつてゐるよな。古文は俺の敵だからな……孝典（俺の友達な）とか予習してあるんじやないか？ 見せてもらおう。

大体、理系な俺に古文なんて必要あるのかよ？

そんなことを考え、プリントを見ながら歩いていなかつたのがいけなかつたのかもしねい。

それまでと全く変わらないペースで左足を前に出した。

地面上に着くはずのところが、何も踏みしめた感覚がない。え、雪で滑つたとかそういうわけじゃないのか！？

そのまま重力に従つて左足が落ちたであらう穴に落ちる羽目になつた。

「うわあああああああ……」

思わず叫んだ俺の声は『近所迷惑だったかもしれない。もし聞こえていた人がいたら誰か助けてくれ。

「つた！」

そのまま落ちていった先にあったのは自然がいっぱいなといひで  
した。

俺が座っている周りには外国人らしき人達がたくさんいます。  
どうやら地下にはたくさん的人が住んでいるようです。

登校中に穴に落ちた高校生より。

じゃなくて。

いろいろと疑問だが、何で道に穴があつたんだ？ つていうか穴  
に落ちた先に更に空が広がってるんだ？ え、この人達誰？？

みんな俺に目を向けて……というかじつと見てくる。  
中には顔が青くなっている人も見える。

「あの……」

「ゆ、勇者様だ！」

「勇者様！」

「王様に報告を！」

「……は？」

『コウシャ』って『勇者』？ 俺が？ ビジのRPG？

尻もちを着いた状態から立ち上がらうとしたら、強烈な眠気に襲われる。  
そのまま視界が暗転した……。

帝国の栄えある首都ライシア、皇帝陛下が暮らしている城の  
とある一室にて

「『勇者召喚』？」

「そうだ。」この村で行われた。

やう言つて地図上のある村を指したのを私がのぞき込む。アルベルティーナ

帝都の北西、帝都からは普通に行つて2日つてところかな。

「陛下から勅命だと言われたのですが、何のことかわつぱりなん  
ですけど……」

数時間前に陛下に呼ばれ「事態を収束していくように」という命令  
令、いや勅命をうけた。

それに是、と返したのはいいのだが、どんなことが起きていて何  
を収束してくればいいのかわつぱりわからない。

「詳しい説明はバルタザールから聞いてくれ。」と言わされたので  
ザール殿下のものに来て何をすればいいのか説明を受けることにし  
たのです。

行くのは私一人。同行者、なし。

「今回勇者召喚が行われたこの村では今の季節に毎年祭りがあるんだ。

今から1000年くらい前の話に則つたものでな……確かにことかはわからないが、

当時世界は魔王に侵略されそうになつていたといつ話がある。

「……魔王？」

「ああ、魔王だ。」

うわー、ファンタジーな世界だからもしかしたら……と思つたら魔王は「いた」んですね。

もう滅ぼされちゃつてるの「いる」わけではないんだ。  
いなくてよかつたけど。

世界征服つてなんかありきたりなんかじ。

魔王について私が考へてゐるのを余所に、ザール殿下は更に説明を付け加えてくれる。

この世界の住人で魔王に挑んでいくものは少なからずいたらしいが、倒すことができなかつた。

そこで当時の最高とも言える魔術師（その頃からも魔術が使える人がいたらしい）が挑んだのが魔王を倒せるものを召喚すること

勇者召喚だ。

召喚された人は数人の仲間を連れ、無事魔王を倒し、世界は平和に戻つた。

話自体はよくありそうなおとぎ話なんだけど、この世界では多くの人があつたことと考へてゐる。

まあ、そうですよね。

実際に魔法が使えて魔物がいる世界だから魔王が居たとしてもおかしくないってことですよね。

今回の私の任務に関わつてきている村は何でもその勇者召喚を行つた場所で同じ召喚の儀式を毎年行つてゐるらしい。

今まで一回もそれで勇者が召喚されたことがなかつたのだが（そりやあ当時の最高の魔術師が苦労して行つたものを一般人ができるやつたらそれの方が問題だ。）、今回の儀式で人が現れた。

まだ調べてゐる途中だけど、今回の召喚は偶発的な事故。

けれど、「勇者召喚」によつて人が現れたことによつて「魔王が復活してゐるのでは」という考え方を持つた人が出てきてしまつた。

「私がやるべき」とは『勇者様』を元にいた世界に返すことですか？」

「ああ。幸いなことに召喚が行われてから日が経つていいない。お前の魔術ならなんとかなるだろう?」

「（なんとかなるつて……）なんとかしてみます。」

「魔導師アルベルティーナ・ギラルティーニ。今回の事態の収束を一任する。」

「承りました。」

## 勇者召還一（下）

……この部屋に俺が生活を始めてからは2日が経った……と思つ。曖昧なのはまずはじめに居たところで意識を失つて気がついたらここにいたわけだが、その意識を失つた時間がどれくらいだったかがわからないからだ。

この2日は一日三食の食事が運ばれてくるだけで他は何もすることがない。

誰かに質問をしたいのだが、外に通じる扉は一つ、扉に鍵がかかっている。窓は小さな窓が高いところにあるだけ。

普通の高校生である俺にはこの部屋から出る手段がないのだ。

そんな状況であるにも関わらず、俺は結構冷静。

自分でもちょっと驚いてるんだけどパニックにはならない。

……けど、この状態があと2・3日も続くのぢゃこんな精神状態じゃいられないよなー。

部屋のノックが聞こえたので返事をする。

お、やつと誰か俺にこの状況を話してくれるこになつたのかな？

「はい？」  
「失礼します。」

そこに入ってきたのは俺よりも年下な女の子。  
着ている服からいかにも「魔法使い」ってかんじ。  
俺がここに来たときも「勇者」とか言つ言葉が聞こえたから魔法があるのか？

「この子、髪の毛は日本人みたいに黒いけど、瞳の色が普通じゃありませんいかんじだし。

「「この国で魔導師<sup>マイフル</sup>の任についてあります、

アルベルティーナ・ギラルティーニと申します。

彼方は今回召喚されたといつ方で間違いないでしょうか？」

「召喚だったんスか？……とりあえずいきなり落ちてきたってことには間違ないと

思うんですけど……。」

彼女は俺が居る部屋をぐるっと見回し、ちょっと考えた後（なんかぶつぶつ言つて）いるのが聞こえた。まいぶる？とか言つていつからなんかの呪文だったのか？それとも独り言つ？俺の方に向き直つた。

「信用できないとは思つのですが、今回彼方がここに来たのは召喚の儀式が

あつたからなのですが、……彼方がこの世界に来てしまつたのは偶發的な事故でして……。」

「事故？」

「申し訳ございません。」

今回俺が来たことについて簡単に説明してくれた。

俺は「世界を救う」とか「魔王を倒す」とか（同じようなことか？）しなくていいんだな、よかつたよかつた。

安心して彼女にすぐに元の場所に返してもらえるのかと聞いたら俺が召喚されてからあまり日が経つていないので可能だという返事が返ってきた。

じゃあ日が経つてたら俺永久に異世界生活だったのかよ……やっぱ

かつたな。

「自分が住んでいたところの名前を教えてもらつてもいいですか？」

「あ、はい。」

これつて普通に 県の××つて言えばいいのかな？  
あ、地球の日本つていうのも必要か？  
必要そつだよな、だつてこゝ、魔法が存在しけり、異世界だもん  
な。

そつやつて話したら「じゃあ始めます」と言つて俺にその場から  
動かないことを指示した。

なんかすごいあつさりとしてるな。

じついうときつて小説とかだと「戻す方法がわからない」とか「  
を倒せば元の世界に帰れる」とかじやね？  
ま、事実と小説は違つてことか。

ボーッと突つ立つていたアルベルティーナけん？ は何やら  
俺にはわからない言語を話し始めた。

さつきまで言葉が通じてたわけだから何かしらの呪文でも呴えて  
るのかな。

「」迷惑をおかけしました。もうこちらの世界に呼ばれるよつな  
ことは

ないと思います。

こちらの世界に来た時間・場所に戻ることになります。」

「あ、ハイ。」

俺がわかる言葉で彼女が話し始めるとほほ同時に、自分の足下に  
だんだんと黒い穴のようなものが広がつていぐ。

……まさか、こっちに来たときと同じ？ また転落すんのかよ？ 体を移動したかったが、それでもし元のところに戻れなかつたら大変だしそう思つて来るであらう転落に備える。

彼女が左手でくると田を描く動作をすると、今までただ黒い地面だつたところがいきなり穴になる。

「うわっ！」

「すみません、帰るときは来るときと同じ手段で戻るよ！」 あつたので……。 「

来たときと同じように六に落ちた俺に最後に彼女が謝つているのが聞こえた。  
君のせいじゃない」とはわかつてゐるけどびびるものはびびるかなー！

じやつ 「痛つ」

・ · ·

田を開けるとそこはこつもの通学路。  
体の下にはコンクリートの道路、周りは塀に囲まれた住宅。

「戻ってきたのか……。」

なんかあつさり終わつたな、俺の異世界旅行。いいんだけどさ。

近くに鞄が落ちているのを見つけて鞄を拾う。  
鞄の中に入っている携帯を何気なく開いて時刻を見る。8時30分。

「……8時30分？」

遅刻寸前！！

俺は携帯と鞄を片手に持つて雪が残っている道を走り出した。

「はい、無事に終了しました。」

「そうか、それはよかったです。」

『勇者召喚』で来た彼は外見からして普通の高校生だった。

「地球」の「日本」って言ってたし、私の「前の」世界だろうな。

彼に言つたとおり、もう誰かが喚ばれるようなことはないだろう。  
私も召喚の詠唱も魔方陣も見たけど、今の魔法理論じゃ他の世界  
の人を喚ぶどころか1M前にある物を召喚陣まで移動させるのも不  
可能だし。

本当に何で今回人が喚ばれちゃったかわからないし。

「召喚陣については？」

「今回何で人が喚ばれてしまったのかわからないくらいの  
失敗作だと思うのですが……。」

「ああ、俺に説明しなくていいぞ。それについては書類で提出だ。」

「……は？」

「物質、ヒトの移動について専門で研究している召喚師が是非とも報告を、だとさ。」

「え？ 私ですか？」

「他に誰も帝国から行つてないだろ？？」

「そうですが……。」

自分でこの村まで来て召喚陣調べればいいじゃないですか。

私、召喚は専門じやないですから。

餅は餅屋つて言つじやないですか！

そういう私が文句を言いたいのを察した遠話越しの殿下がため息をついていった。

「城に居る召喚師はじつわんぱつかりだ。……もつそんな遠出で  
あらゆる年の方々じゃないんだよ。召喚に対する情熱は人一倍だから手は抜  
くなよ。」

「……」

「父上がティーナは一週間滞在可能な時間が空いてる……いや、  
空けたとおっしゃつていた。」

「一週間ー？」

それくらいの時間調査るのはいいですけど、この村の人達と一緒にいるのつきついてあるんですよ？

彼のいる部屋を教えてもらつのにも時間がかかりましたし、召還したら今度は「何で勇者様を帰したんだよ」みたいな目で見られるし！

そんな私の心境を知らない殿下は「父上がそこににある召喚陣はティーナが記録して消していくように」という命令だ。がんばれよ。」  
と言つて遠話を終わらせた。

……召喚陣が刻まれている石版まで行きますか。

「勇者召還！」

終

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4556n/>

---

導くもの+

2011年1月23日05時30分発行